

# 未来の飛馬を担う若手農業者



前相馬地区の柴田 康平さん（37歳）

J A相馬村管内には、これからも新規で就農する若手農業者が数少ないとされているが、青年部には去年、今年と入部してくれる盟友が毎年おり、将来農業者になるための活動を行なっている。

今回はその中でも、今年 J A相馬村青年部長に就任した前相馬地区 柴田康平さんにお話をきいた。



お世話になった人へ贈答用リンゴを支度する

## 元 J A職員としての強み

柴田さんはリンゴ農家に生まれ、高校卒業後七戸町にある宮農대학교へ進学し、農業の基礎を二年間学んだ後、J A相馬村へ就職した。J Aでは販売課に所属し、リンゴ販売を中心とした仕事をこなし、多くの生産者との関わりも持つことが出来た。柴田さんは多くの生産者から自分の家のリンゴ作業の状況を聞かれることもあり、頭の片隅には常に農家を継がなければいけない思いがあったという。そんな中、父親の容体が悪くなり、これ以上両親に負担をかけられないと、6年間務めた J Aを退職し、就農を決意した。

柴田さんは、小学生のころから小遣い稼ぎなどで収穫作業を行ったり、中学生の時には葉摘み作業を行ったりと、年齢を重ねるにつれて農作業の大部分を経験していったという。そのため、就農した時にもその時の経験や大学で学んだことを活かして作業が出来ると思っていた。しかし、実際に自分が毎日初めから最後まで作業計画を立て、責任を持って取り組むようになる、とても大変だと感じた。

## 今までは農作業を手伝いに行っ

ても、ハシゴや農機具などが段取りされている中で作業をしていたり、8時から17時まで作業をすれば帰れると考えていた。その頃は、自分の心の中には「やらされてい」るよつな感覚がどこかにあったという。さらに「自分が動かなければ何も作業が進まない」という当たり前のことを就農して実感した。一番学ぶことが多かったのは父親からであり、父親の存在の大きさに気が付いたという。

また、J Aに努めていた時に関わっていた生産者の方々にも相談に乗ってもらい、とても助かったという。同時に周りにいた同世代や近い世代の農業者とも時間を共有し、楽しみ方も覚えていった。こうして J A時代に培ってきたものが今になっても活かしていた。

## 一生懸命さが結果に出る

柴田さんは農作業の中で一番難しいのは剪定作業だという。剪定作業は大学でも基礎は学んできたが、実際にやってみると正解が無く、毎年悩んでいると話す。仲間や先輩方と相談しながら取り組ん

でいたが、中々収量にも反映してこない時期があり頭を抱えたこともあったという。だが、毎年一生懸命剪定作業を行い、秋の収量に反映してきた時にはとてもやりがいを感じたという。剪定作業に限らず、農薬散布や、授粉作業等をしっかりと行う事で秋に着色や食味、収量という形で結果が現れる事が農業の醍醐味である。また、以前所属していた「相馬村青年の会」で自分たちの作ったりんごを販売しに行き、消費者から「甘くて美味しい」「また来年も来てね」という暖かい言葉をかけてもらい、自分のりんごが評価された時が、りんごを作っていて良かったと感じる瞬間だと言った。

「自然相手の仕事だからこそ難しいが、これからも美味しいりんごを作りたい。」と来年からの農作業へ意気込んでいた。

### 組織の活動を大事に

柴田さんは現在、JA下部組織のわい化研究会や相馬支会連合会紙漉沢支会や、青年部に所属している。中でも青年部では今年度から部長を務めている。去年までは

青森県農協青年部協議会役員、中弘南黒青年部連絡協議会会長も務めた。これらの組織での取組の中で沢山の仲間が増えていく事が財産だと話す。自分の事を気にしてくれたり、気晴らしに誘ってくれたりする仲間が増えていくと言っているのは大事なことだと語った。

青年部では牽引していかねばならない立場になったが、「なんでも気にせず意見を出してほしい」と部長へ就任したときに部員に伝えた。もっと部の中で様々なアイデアが出れば部の活性化に繋がる事にもなる。そのためにも気軽に意見を出す事が出来るような環境作りが大切だと思うし、自然と良いアイデアが産まれるように、日頃から部員との関わりを積み重ねていきたいと思っている。所属している組織の中で築いた仲間や協力してくれる先輩方とは長い付き合いになると思うので、これからも感謝の気持ちを忘れないうよう、組織活動を続けていきたいと述べていた。

### これからの若手就農者へ

相馬管内には若い人は少ない。い

たとしても実家が農家では無かったり、実家は農家ではあるが若い人は一般企業で働いていたり、実際には難しい面であると感じている柴田さん。

農業は厳しいとか、きついというイメージを持つ若者もたくさん居ると思うが、難しいと思えば解決に導いてくれる先輩方がいるし、きついと思えば助けてくれる仲間がいる。

更に農業は、地元での活動がメインであるため、地域が元氣かそうでないかが手にとってわかる。だからこそ「自分の地域を元氣に」という地域貢献にも自然と力が入る。相馬ねぶた愛好会に携わっているが、地域の人々が笑顔で集まっている姿を見ると「相馬もまだまだ捨てたものではない」と、ますます元氣になるといふ。

農業に興味があるものの、一歩を踏み出せない若者に「未来にこんな世界が待っている」と伝えて行きたいと語る柴田さん。

「今年からJA相馬村の正組合員となったので、より一層地域を盛り上げられるよう努力し、もっと楽しんで、最高のりんごと最高

の仲間を作っていきたい」と最後に意気込みを語った。



柴田さんと共に地域を盛り上げる青年部員ら



ねぶたを通じて地域の方との交流